

## 季節繁殖について少しご紹介



こんにちは、齋藤です。いよいよ秋が近づいてきましたね。一日の気温の寒暖差が激しい季節となりました。皆様、お身体崩されませぬようどうかご自愛ください。

秋になったということは、私ももう1年半勤務している立派な(!?)2年目です。2年目ともなると、「もう検診行ってるの??どんな農家さんなの?」と聞かれることが多くなってきました。去年から放牧酪農家さんを1件担当させていただいているのですが、**放牧酪農**、それも**季節繁殖**についてパッとイメージできない方も多いかと思います。そこで今回は、担当させていただいている農家さん(以下A農場とします)を参考に、季節繁殖について少しご紹介したいと思います。

季節繁殖とはズバリ、「**出産を春に集中させること**」です。例えば、搾乳頭数が約50頭規模のA農場では、育成も合わせて来年の2月から5月までの3か月の間に41頭の分娩があります。分娩が一気に押し寄せるので春はかなり忙しくなりますが、まとめて産まれたほうが親や子牛の管理がしやすいという利点もあります。また、放牧草の育ちが最も良い春にフレッシュ牛が集まるので、餌代も最小限に抑えられ、草の栄養だけで多く乳をだしてくれます。放牧酪農家にとって放牧草を最大限に活用できる、というのがこの季節繁殖の売りです。放牧酪農にとってこんな利点の多い季節繁殖ですが、これを実現するためには**高いレベルの繁殖成績**が求められます。毎年春に生まれるようにピッタリ1年1産を目指さなければなりません。

季節繁殖を始めるにあたって1番最初にすることは**授精開始日を決めること**です。これは通年の牛の様子や草の伸びを確認して農家さんが決定します。今年のA農場では5月25日を一斉授精スタート日としました。次に意識することは**最初の3週間での授精率**です。つまり、授精開始日から発情周期の21日間の中でどれだけ発情を見つけ授精できるか、ということです。A農場では



授精開始日から21日後の6月15日までに全頭授精を目標に掲げ、授精すべき牛のリストを農場に貼り、あとどれだけの牛が残っているかを常にチェックしていました。そして次にポイントとなってくるのが、**6週間以内での受胎率**です。6週間、つまり発情の2周期以内に受胎させよう、2回以内の授精回数でとめよう、ということです。ちなみにA農場では最初の3週間での授精率は80%、6週間以内での受胎率は77%と、かなりの好成績でした。こんな好成績を収めることができたのは、土づくりや草づくり、牛づくり、そしてなんといっても農家さんの意識の高さによるものです。

A農場の授精方法に関しては、毎年春に今年は何頭メスが欲しい、ということをお話し合います。通常精液を0.5頭、メス判別精液を1頭とカウントし、発情が来た順にどんどん授精していき、仮想ホルメス子牛が必要頭数まで確保できしだい、F1精液を授精していきます。今年のA農場の繁殖成績をふまえて、来年はもっとメス判別精液の使用を増やそうか、受精卵にもチャレンジしてみようか、と早くも来年の構想を練っています。

今回は季節繁殖について少しご紹介しましたが、なんとなく季節繁殖とはどういったものか想像していただけただけでしょうか。もちろん季節繁殖だけがよい繁殖の方法ではありません。A農場では季節繁殖が適していた、というだけで必ず各々の農場で適している繁殖戦略があるはずですが、まだまだ勉強不足の2年目です、「うちはこの戦略で繁殖成功している」等ありましたら、是非教えてください。